彰義隊ー会田映水　静ー加藤喜水　東郷元帥ー小嶺炽水　常陸丸ー長野秦水　細川ガラシヤー野池信水　松の間ー阿部奨水　洞翁丸ー札幌山崎紅水　舟弁慶ー太白詩水　川中島ー加藤夕水　勧進帳ー加藤斐水　西郷隆盛ー古谷晃水　横笛ー北沢来水　本能寺ー柴崎珀水　別れの国歌ー小林了水　吉田松陰ー榎本芝水

○…明治百年、協会創立二十周年記念各流派演奏大会　十月二十七日京都島原歌舞練場（主催京都琵琶協会）ー別項参照ー

○…琵琶楽開祖四百年祭記念名流大会　十月二十九日東京日本橋三越劇場（主催東京新聞、協賛日本琵琶楽協会）　秋風故郷山ー長谷川旭苑、絃藤巻旭鴻　勧進帳ー石田脩水　北の庄ー山田旭芳　小松の操(三)ー鈴木鶴岡　城山ー仲川秀邦　涛陽江ー鈴木鶴謳同(下)栗原雨竹　淀君ー津谷桜佳、絃新部桜水ー水藤錦穣　俊寛ー大阪広瀬緻水　紅葉狩ー彼ノ矢洲友　堅田落ー鈴木旭美　西郷隆盛ー山田洲鳳　那須与市ー押川旭葉　旅順開城(上)ー遠藤鶴東　同(下)ー吉成登城　琵琶舞五位鷺ー詩吟藤波白林、琵琶水藤錦穣、都錦穂、新部桜水、藤波桜華、木村雅趣雨、十七絃国重歌栄美、立方中村冠子外　新撰組ー小沢錦弥　恨の軍旗ー宮田旭寿　彰義隊ー古家絃風　月下の陣ー前田洲月　白虎隊ー古田耕水　大原御幸ー小絃竹下翠風、正絃広瀬翠紅　大楠公ー藤巻旭鴻　さくらー弘沢雨水　講演ー吉川英史　迷語もどきー辻靖剛

○…琵琶と詩吟舞大会　十一月三日西宮市夙川公民館（主催三浦蓮水会）　月下の陣ー竹内吟洲　会津白虎隊ー小倉吟信　吉野山懐古ー松岡槍月　菊水の旗ー荒木吟城　城山ー山県蓮山　詩舞小楠公の母ー琵琶三浦蓮水、青柳芳枝外　本能寺ー反町紫水　別れの盃ー井上碧水　西郷隆盛ー久内舟水　琵琶舞絵本鏡山ー三浦蓮水、立方青柳芳枝外　児島高徳ー木村蓮水　平泉回顧ー三浦蓮水　鳴呼八月十五日ー京都平井春嶺　大物の浦ー神戸柴田旭堂　戦艦大和ー大阪馬瀬槍水　外に吟詠二十一、詩舞二、剣舞一

○…弾奏大会　十一月十日鹿児島市県婦人会館（主催市教育委員会、南日本新聞社、薩摩琵琶同好会）　春日野ー久保せい　薄陽江(上)ー大迫正男　迷語もどきー尾辻達志　月下の陣ー小浜氏宏　太田道灌ー川畑前金剛石ー小野千和　桜井の駅ー神宮司純紀　小松の操(二)ー田中義啓　華の香ー山崎清菅公ー高江行道　武蔵野ー加藤弟吉　王昭君ー伊地知忍　城山ー春日周一　旅順の乃木将軍ー山下旭耀　薩摩義士ー小野天涯　是枝柿右ェ門ー堀金義　川中島ー前村弘木崎原合戦(三)ー川野虎男　物狂ー染川明道　難廻り ー平田宗良　若き教盛ー柿木旭利　広瀬中佐ー鮫島宗親　乃木大将ー肥後節　本能寺(下)ー小畑鶴峰　小教盛(二)ー安田幸吉　吉野落(二)ー加納南竜　彰義隊ー萩原竜洋　忠度都落ー池田天舟　形見の桜(三)ー肱岡武二　蓬莱山ー木原育水

○…明治百年記念錦心流秋の演奏大会　十月十六日大阪太融寺会館（主催一水会大阪支部）　会津白虎隊ー吉田正光　常陸丸ー松岡槍月　恩讐の彼方へー飯塚棣水　白虎隊ー佐々木寒水　俊寛ー中西鎮水　戦艦大和ー古田東水　楠の下露ー番匠渚水　竜の口ー木村蓮水　鉢の木ー小川吟水　楠正成ー尾山好水　花吹雪ー田中歓水　石童丸ー米沢珊水　井伊大老ー藤原英水　野田の笛ー東憲水　光秀の最期ー馬瀬槍水　城山ー神戸久内舟水　舟弁慶ー京都関口濤水　平泉回顧ー神戸三浦蓮水　西郷隆盛ー東京秋嶺水

あとがき

黄に色づいた銀杏の葉が風もないのにパラリと落ちる、落葉を踏みしめる足の裏の感触、あゝ秋も終りだなと思う途端に琵琶のお師匠さんも走り出すという「師走」がやって来た●過ぎた一年を顧みてさて何をしたかと考えると、之と云って社会に貢献したような業蹟もなく徒らに馬齢を重ねてゆくようで恥しい●十二月号には村井康彦先生の諧謔に富んだ「維新前後」や長浜南城氏の新作琵琶歌「マッカーサー元帥」、柿本錦城氏の「頼三樹三郎」を始め「敵は本能寺」「パトロンとスポンサー」その他予定していた興味しんしんの読み物が記事輻輳のため次号廻しとなって執筆者の好意に反し申訳ない次第●お蔭様で本紙も来年は発刊十五周年を迎えるが益々内容の充実を計り上記数篇の名文も来月号以降に掲載して読者に喜んで貰いたいと思っている、御期待乞う●では皆さま、どうぞよいお年をお迎え下さい。

昭和四十三年十二月一日発行（非売品）
編集者　植村寛水
発行所　京絃社
京都市北区衣笠西馬場町二九
和田第一ビル　二〇一号
電話(463)八三二六　(461)二八七六番
内線　二〇一番

琵琶機関紙　京絃社　第一七四号　京

随筆

近頃憶うこと（その四）

長浜南城

琵琶八年というから、八年以上弾いている人々の弾法はねじめがしっかりしていて、聞いていても結構だと思われるが、歌の方は仲仲八年では完成するものでないらしい。

琵琶は他の楽器と異なり一人二芸であって、弾法に比べて歌の方が大分難かしいと思うのは私独りではあるまい。琵琶歌は歌謡曲などと全然その節や調子が本質的に異るからで、この本質的な発声や歌調や語尾に永年の苦心と練成を要し、美声だけでは歌にならない。

最近テレビで歌謡曲の最後の歌詞を二辺も三辺も繰返して謡うのが流行し、ひどく耳について苦笑して聞いているが、斯様ながしを歌の節だと考え違いしてはならぬ。歌は永たらしく同じ調べて矢鱈に引っぱり廻すことは、歌の節ではなく一番禁物である。

勿論歌詞が粗末であるから斯様な作曲になるのであろうが、五十年間も邦楽を続けて来た私達から観れば、心を打つ作詞作曲が極めて少なく、特に外国語の歌など、支那人の日本語みたいな発音では人心に与える感銘などあり得よう筈はない。海外に留学した私には現在でも外人の友が多いが、何時も話題に出る問題である。放送局やテレビ局は飽くまで日本的な演出や企画が、もっと邦楽を中心にしたものに代行されて良い。その方が遙かに種々の意味で効果も高められる事になる。

要するに節は短かきを尊ぶ、節は語尾にあり切目に潜む、琵琶八年の歌の完成は斯かる所に妙諦が輝き初めるのである。

秋の夜、静かに低音で愛器を奏でる時、嚔嚔切々として泌々と胸をうつ琵琶を習って良かったと、痛切に憶われるのである。

狂酔亭漫録（四十三）

古谷竟水

徳川幕府が愈々赤穂へ受城使を差遣する段に至って、浅野の城代家老大石内蔵助なる人物は、平素昼行灯と称せられ乍ら、いざ事ある時は仲々の硬骨漢であるとの噂が立った。

その所以は去る元禄六年冬、備中松山の城主水谷出羽守勝資の死去に伴い後嗣の無い為領地を没収された際、受城使を命ぜられた浅野内匠頭に大石が随伴した。巷説に依れば幕府の措置に反旗を飜した水谷の藩士数百名が城を枕に討死の決意を以て立籠ったと聞き、内蔵助は主人の名代として単身城内に乗込み蘇秦張儀の辯を振るって一同を説服し、無恙開城受取に成功したと称する。所謂大石松山城受取の一席だが、之も世俗作家の脚色で、史実は大石は単に主人に随行し、その指図の下に松山藩の家老鶴見某との談判が相当良好の結果を招いた程度で、兎に角この受城一件は無事落着したので、此の噂が江戸に伝わり大石の評価が跨大宣伝された為であった。

赤穂開城に就ては快挙録が正確詳細に報じているので此の要点を摘録してご披露する。

愈々数日中に受城使赤穂到着とあって、近隣諸侯は出兵して領界を固め、赤穂城下には宗家浅野安芸守、其他同族大小名よりの暁諭使等数百名が入り込み相当の混雑を予想されたが、内蔵助は少しも騒がず城内防備を戒厳し、卯月の空とは云え朔屋の城下は雨か嵐か人心恟々巷説紛々であった。

折柄四月十八日副受城使御目付荒木十左衛門、榊原采女、知郡事代宮石原新左衛門、岡田荘太夫等の一行は既に領内まで入込んだとの報が達した。大石と奥野将監は之を中村川まで出迎え、恭々しく遠来の労を慰問し、先に馬で引返し守城の諸士に号令し城門を開いて待受けた。副受城使と雖も幕府の直派で、実質上の首脳であり、この両使の内閲は是非必要なのである。

内蔵助は諸士を戒め、其身は大手に於て両

使に拝謁、自身先導して大広間に請じ、重なる藩士は伺候する。両副使は厳かに「此の度本城御召上と相成るに就き、本官等は今日先づ下見分をする。」と口達した。内蔵助は「畏まり奉りまする」と御受し、国絵図、郷村牒、金穀牒、城内備付武器什具目録等を其の検閲に供した。両使は案内につれ城中を見分する。

その洒掃は行届き一塵をも止めず、大手、搦手、本丸、二の丸、三の丸、到る処の詰所は宗従の武士で固められたが、両使の通行にはハッと下座する。その礼容節制の立派さには両使も驚き「斯かる名藩を取潰すは如何にも惜しき限り、それにしても大石の力量手腕実に君国を辱かしめざるもの」と深く感嘆した。

内蔵助は両使を亡君内匠頭の居間へ案内する。綺麗に清掃され恰かも主君の存す如き体である。両使は粛然と容を改め敬礼の意を表する。此時大石は徐ろに懐中の哀願書を取出し恭々しく両使に捧げて末座に平伏する。

「今度内匠頭不調法に由って切腹仰せ付けられ続いて城地御召上の儀は、松平安芸守殿戸田采女正殿からの御内諭をも伺い、今日謹んで城池御返上仕る儀におざりまする。（中略）我浅野家は祖先弾正少弼以来権現様御取立の家筋にて御座りますれば、格別の御恩典を以て、大学儀に寡君の跡目仰せ付けられる様、家中一同哀願し奉る次第にお座りまする（中略）御恩裁の御沙汰を蒙り次第、某等一同故君の廟前に自裁仕り、人臣の義を終らんと、兼て覚悟罷在る儀に御座りまする（下略）」と陳べ両使も深く感動したが、軽卒に諾否を表すべきに非ずと、只黙して頷いた。

室鳩巣の義人録では「良雄官使に告ぐるの言を味うに、其が主家の為に後を立てんと請うものは、人臣の分を尽すというに過ぎざるのみ、さり乍ら死を以て国に殉ずるのあり、所謂確乎として抜く可からざる者なり。其の言を聴け、より此を以て易えざるものあり、所謂確乎と彼は曰く、必らず恩裁の下るありて然る後、退いて自殺せんと。然らば命（めい）を得ざらん乎、敢て手を束ねて徒死せざるや、亦明らけし、（下略）」と、鳩巣の史眼は肺腑を照らすものであるが、筆者想うに、大石の言動は、お家復興の不可能を知りつつも、一応は之を公言し、開城の措置に対する臣下の名分を明かにしたもので、換言すれば肚裏に復讐の覚悟を決めての上の一芝居とも考えられる。

史眼は裏の裏まで見透す必要のあることを如実に証する一例である。（此項未完）

切抜帳から（三五）

平井春嶺

○ 終戦の真相（一三）

九、終戦に対する八月九日の御前会議の状況と大御心の有難さ（1）

最高戦争指導会議に於きましては、議論は二つに分れたのであります。即ちポッダム宣言を無条件に受諾してここに戦争を終結すべしという意見と、このまま本土決戦を覚悟して戦争を継続すべしとの意見が対立したのであります。

この決戦論者も唯連合軍側がその時のままの状態で停戦し、我軍隊も無条件降伏という形をとらず、それぞれの地点から自発的に撤退復員することで満足し、保障占領軍も我本土に上陸せず又戦争裁判を日本国の手によって行うことを承知するならば、戦争をやめてもよいというのでありますが、それは出来ない相談でありますから、結局戦争を継続するというわけであります。閣議に於ては経済関係閣僚からそれぞれ国内の経済力、軍需力の話がありいずれも戦争終結を主張されましたが、内務大臣はここで戦争をやめるとなると、右翼が騒動を起す恐れがあって国内治安が心配であるといい、又阿南陸軍大臣は関東軍は遺憾ながら対ソ戦を実行する力なく、このまま推移せば二カ月にて関東軍は全滅するだろうと言われました。

この間に長崎に第二回目の原子爆弾の攻撃が行われました。閣議は午後八時に至るも議決しませんので一応休憩しました。

この時総理は私（迫水久常氏以下同じ）をお呼びになり、どうしようと御相談がありました。私は「誠に懼れ多いことと存じますが、陛下の御聖断を得て事を決する外はございますまい」とお答えいたしますと、総理は「実は自分もそう考えて今朝拝謁しましたときに、いよいよの場合は陛下にお助けを願いますということをお願いして来た」と言われます。私は総理の用意のよさ、陛下の有難さに感激致しましたが、偖、問題は陛下の御聖断を如何なる方法で受けるかということであります。

即ち総理が参内してそこで陛下のお思召を伺って、大臣その他に伝えるのも一つの方法でありますが、そういうことをすると、陸軍の若い人達など総理はうそを言っているといって、どういう事態が起らないともかぎらない、と思いましたので深夜懼れ多いと思いましたが、御前会議を開いてその席で御聖断を承るようにしようと決心しました。

所が御前会議を開く為には、陸軍参謀総長、海軍軍令部総長の同意を必要とします。両総長は政府及び軍の意見が統一しない限り、御前会議を開くべきでないといって同意が得られません。私は当惑しましたが遂に強引な手段を取りまして、半ば両総長をだますようにして二人の署名花押をとり、御前会議を開くこととしたのであります。（此項未完）

遺酔迷語

木村維水

一句の意味する重要性について

石川富士雄氏作「井伊大老」を今年二月の一水会京都支部例会にて初めて弾奏したところ、演後「雪深深（ふかぶか）と降りしきると歌われたが、あれは雪深深（しんしん）と読まねばならぬ。次の文句が降りしきるだからしんしんと降りしきるであり、ふかぶかであれば降り積もるであらねばならない」との注意を受けた。私は何分初演の事であるので此注意を素直に受けて、翌月京都琵琶協会の例会に同曲を演奏し「雪しんしんと降りしきる」と歌ったところ、あれは雪ふかぶかと歌うべきだと先輩より注意せられた。ところが「次の句が降りしきるだから矢張りしんしんと読んだほうが意味が通るのではないか」と前月同様の説をなさる方も出た。しかし先輩は「これは自分が曾て原作者の石川さんから直接ふかぶかと読むのだと聞かされたのだから、続く文句の如何に拘らず、原作者の言葉通りふかぶかと歌うべきだと強調された。

私は帰宅後、自分なりに納得のゆくよう研究せねばならぬ事を痛感して参考書を繙いた結果次のような解釈を得た。

参考資料

昭和十二年富山房版「大言海」

滲滲（しんしん）と、雨雪の降る状に云う語。

黄庭堅送杜子春」詩「雪意滲滲満面風」

深深（しんしん）と、静まる状、又更け行く状に云う語、狂言記「夜深々と更り渡る」

深深（ふかぶか）、殊に深き状を云う語、飛鳥川当流男（元禄）「熊谷編笠ふかぶかときたるも云々」松の葉（元禄）四、狂女「たれしを音の加賀笠を眉ふかぶかと着なしつつ云々」

深（ふか）、他の語に冠して深き意をあらわす語、拾遺集八、雑上「海にのみひぢたる松のふかみどり幾しほとかはしるべかるらん」続千載集七、誹諧歌「かち人の野分にあつる深衰の毛を吹くよこそ苦しかるらん」

昭和十七年三省堂版「広辞林」

深深（しんしん）と、夜のふけ行くさま、「夜はしんしんと更け渡る」

深（ふか）成語に冠して深き意を表す、「ふかみどり」

積る（つもる）重なりて嵩たかくなる、加わりて量多くなる「雪つもる」

富山房版「大言海」

降りしきる、頻りに降る、降りしく、万葉集十、七、「梅の花咲き散り過ぎぬしかすがに白雪庭に零重（ふりしきり）つつ、

私はこれ等を資料として「雪深深と降りしきる」の一句は、（しんしん）と読んでも、（ふかぶか）と読んでも差支えないのではな

明年一月発行の本紙は例年の通り新春特別号とし紙数を倍増して内容豊富の記事を満載し、併せて新年交礼号として貴名を掲載させて頂きたいと存じます。

新春特別号発行について

遠隔地同好者間の旧交を温ため、お互いの健康を祝福する意味を含めて多数御協賛下され度別紙申込用紙に料金を添え十二月十日迄に御申込み願上げます。

いかと思う。しかし只単に雪の降る状をのみの表現に止めてよいかどうかに疑問を起すのである。作者の作意が降雪の状景のみを表現せらるゝのであったら、むしろ「深深」の字句は用いられず「滲滲」或は仮名書きにて、しんしんとせられたであろうと思われる。然るに殊更「深深」の字を使われたことには、此一句にもっと深長な意味を含められたのではあるまいか。

幕末史に一大転機を劃したとも云うべき、井伊大老の暗殺が直後に行われ、静かにふかぶかと降る雪も積もれる雪も忽ち朱に染められ踏み乱されるその嵐の前の静けさを此一句に表わされたのではあるまいか。私の意訳に立脚すれば、此句を「大干流し」の節調で演ずるのは適しない気がする。むしろ「地の下」で静かに歌うべきではないかと思う。

此の私の解釈に意を得たのは、さる日京都琵琶協会例会にて演奏された吉野洲水氏の此句の表現に共感する所あり大変結構に拝聴したのである。

（此頂おわり）

続・琵琶界物語（十七）

史跡に富む名勝須磨明石

清水史水

筆者は二十数年間住み馴れた須磨の高台の居宅から本年正月明石市に転居したが、以来通勤と朝登山の関係上、毎早朝と夕べ須磨明石間を国電で往復している。途中車中から眺める同区間に連なる風光や史跡などを主として記述してみたいと思う。

まづ、須磨寺大本山は九百年の古い歴史を有し、源平合戦の由緒ある古刹で数年前境内に宝物館が新築され、続いて昨年三月敦盛、直実の銅像が完成し、又本年四月には小学国定唱歌「青葉の笛」の音楽碑が建立された。須磨寺は昔から俳聖芭蕉を初め文人墨客が数多く歴訪したが、是等の歌碑も山内に数基があり、又国宝観世音菩薩像が宝物館屋上に鎮座ましますが、筆者は今日迄に同館講堂で琵琶演奏会を約十回主催公開している。

須磨寺から西へ約四百メートルの所に須磨関所跡がある。こゝ関守神社境内の源兼昌作百人集の歌碑に「淡路島通ふ千鳥のなく声に幾夜寝覚めぬ須磨の関守」があり、関所は主として海洋船舶出入監視が任務で、毎夜瀬戸内海の波面を見渡しながら監視を怠らなかったという歌の意味が窮われる。

須磨明石の内海には朝夕郵船、機帆船、飛行艇等種々雑多の隻影が往き交いて紺碧の海洋を彩り、壮大且つ美観を呈している。

電車が須磨駅を過ぎると須磨浦公園にかゝり、東方丘陵に安徳天皇行在所のある高峰が見え、その真下に源平戦い浜の記念碑が眼中に入る。それから三百メートル西方に史跡敦盛塚がある。この辺りは明治の中期に俳人正岡子規が長期療養しつゝ詩作に耽った所で、山の中腹に子規、虚子の句碑があり、こゝより塩谷駅に至る。その昔敗走の平家の兵船、軍団が四国の屋島に逃れた拠点の海浜はこの辺りである。

或る雪の日の拙句「海碧く陸に雪あり須磨明石」。又海浜公園の脊山古戦場鉄拐連峰を詠んだ拙作「鉄拐の峰に奏づる琵琶の音に登山千回且の授与式」。

次の垂水駅を過ぎると遙か北方の石谷山に筆者自作琵琶「武藤山治翁」の墓陵がある。この墓形方式は歴代天皇御陵を小形にした土饅頭型で、丘の岩根を二メートル程掘下げた洞中に地下室を設けて遺体を安置したもので、松籟の立籠める霊地に墓標が立っている。

舞子駅前の舞子公園内鐘紡舞子クラブが武藤翁の本邸であった頃の明治三十九年には神戸港に於ける観艦式に行幸の明治天皇に属従した東郷元帥、乃木大将両将軍が宿泊された事もあり、昭和二十六年から十年間に筆者はこゝで琵琶会を十数回主催し、関西琵琶人の来演者で宿泊した人も多く、筆者四十数年の琵琶生活中で最も思い出の深い所である。

海浜舞子公園は老松林で名高く、淡路の島山が指呼の間にあり絶景の海辺に明治天皇御製の「はりまがた舞子の浜に旅寝して見し夜恋しき月の影かな」外二首を刻んだ大理石碑が輝いている。

明石駅の北方丘陵に最近明石市立天文科学館が出来、これに続いて青葉の樹木に囲まれた明石城が聳え、往き交う旅人の眼を楽しま

せている。明治維新当時明石藩士の一隊が上野彰義隊に入って奮戦したのは有名であるが、城廓は現在公園となっていて、城主松平若狭守茶の湯の井戸の碑が園内中段に苔むして往時の武将の俤を偲ばせているし、外壕の紺碧の水面には白鳥二羽が日ねもす悠々と泳いでいる。

光栄！感激!!

高松宮・同妃両殿下御前演奏

吉野洲水

この度の福井国体に御臨席の高松宮殿下御夫妻が十月四日芦原温泉べにや旅館に御投宿になり、鯖江市並に県の肝いりで御前演奏の光栄に浴した。事前に郷土編三曲と外二曲を録音したテープとその歌詞を県へ提出しておいたが、郷土の「柴田勝家」（雨田光平、吉野洲水合作、洲水作曲）と決り同曲を謹奏した。

演奏が終ると両殿下から色々御下問があり、誠に民主的で感激の極みであった。殿下は「久しぶりに良い琵琶を聴いた」「何歳から琵琶をやられたか」「永田宗家に直接習ったか」等、妃殿下からは「あなたの琵琶は歌詞が非常に解り易い」「長唄の大薩摩のような早く弾く処はむつかしいでしようね」等々。

宮内省の方から「お側へ寄ってお話しなさい」と云われたが、畏くためらっていると、記念に一緒に写真をとってあげるからと云われ恐る恐るお側へにじり寄ると、妃殿下から「琵琶をちょっと抱かせて下さい、こう持つのですか、撥の持ち方は？」などと聞かれ、殿下は「琵琶は相当古いものでしよう、弾くのは仲々むつかしいでしよう」等色々やさしく御下問があり「琵琶は日本へ伝った楽器中最も古いもので、特に薩摩琵琶は絃の押さえ方一つで違った音色を出す誠に不安定、不完全な楽器ではございますが、練磨によっては他の楽器に見ることの出来ぬ玄妙と申しますか、楽譜にも現し難い音が出ると云われて居ります」とお答すると頻りに頷いておいでになった。

退出して控の間で頂いた夕飯の美味さ！あゝ糸が切れなくてよかった、読み違いせずに良かった。精進之れ務めた甲斐あって喉の調子もよく、事なく済んで良かったと感激と解放感が一度に溢れ出た。

あゝこの感激！この光栄!!琵琶を習ったお蔭で、今更の如く流祖永田錦心先生、私をこゝまでお育て下さった恩師並に諸先輩の御恩、未熟な芸を御前演奏へと斡旋下さった方々の友情御支援を思う時、私は何たる幸福者よ、と満足感に浸りつゝ息子が運転する車で家路に向った。

（註）吉野洲水氏はこの光栄を記念して十一月十六日昼夜福井市と鯖江市に於て東西の名手五師を招き大演奏会を催された。

明治百年、創立二十周年

記念大演奏会

戦後京都在住の薩筑錦各流派琵琶人の総意により創立された京都琵琶協会は、その後陣容強化と内容充実をはかりつゝ茲に二十周年を迎えたが、偶々本年は明治百年に相当するので、この二つを記念して今秋協会主催の大演奏会を開催しようという意見が期せずして盛上り、爾来よりより準備を進めて菊花薫る十月二十七日（日）京都島原の歌舞練場で華華しく幕を明けた。

会場は、忠臣蔵の大石良雄が豪遊したという、太夫の道中で名高い旧遊廓内にある粋な構えで、花道を控えた照明自在の大きな舞台。緞通を敷き詰めた大客席や特別桟敷、二階桟敷など京都式日本座敷に聴衆は開幕前から詰めかけて程なく超満員となり、「どうぞおつめ合せを…」と客席に向って何回も放送するの状態であった。

舞台や玄関口には豪華な数個の花輪が飾られ、二双の金屏風を背に正午から夕六時まで各流派の演奏が続けられたが、今回は弾奏曲目を明治以降の事蹟に限定して、概ね時代序列に番組を編成し歴史的に回顧してみることを企画したのが特に聴衆に興味と感銘を与えたようで、一曲ごとに万雷の拍手が堂をゆるがした。

斯くして予定通り全演奏を終り、記念撮影に引続いて別室で祝賀の宴を張り、来賓を合せて約六十人が列席したが、その中にアメリカ、フランス、ドイツ人が七人居て、日本の古典琵琶演奏に対する感想や希望を披瀝されたのは大いに参考になり良き印象を与えた。尚、当日先着来聴者に粗品を呈し、また出演者には記念品が贈られた。

演奏曲目と演奏者次の通り（戸倉旭嶺、中島真水、天津旭八千代三氏病気又は突発事故のため欠席）、石童丸（旭濤門渡辺）、菅公（旭穂門日家、山香、臼井、モニカー）、白虎隊（旭濤門山崎、清水）、花の白虎隊（旭穂門栃尾、森田）、湖水渡り（旭濤門山崎、清水、田華、広瀬）、夕鶴（旭穂門岩井）－以上琵琶詩吟。常陸丸（田中鵬水）、松岡幸蔵（美登里進水）、橘大隊長（水内媞水）、二〇三高地（若宮旭登）、旅順開城(上)（四明会栗本天芳）、伊藤公（伊吹正陽）、西郷隆盛（京都一水会関口濤水）、乃木将軍（古谷竟水）、武石浩坡（白浜峰口高昇）、名馬宗泉号（梅原旭濤）、真珠湾攻撃（平井春嶺）、姫百合の塔（中島旭穂）、学徒出陣の賦（植村冥水）、戦艦大和（矢吹華水）、終戦回顧（吉野洲水）

京都琵琶協会二十周年に

井上兼子

私共が琵琶を聴かせて頂くようになりましてからもう十五六年になりましょうか、最初は寺町の天性寺の前を通りましたら立看板に琵琶演奏会　来聴歓迎　とありましたので、姉さん、一寸聴いて来ましようかと入りました。それから度重なるにつれ御案内を頂くようになりその都度よせて頂きました。いつもの日の買物迄まわりに並べ憶面もなくたゞ一心に聴いておりました。そして持参のおべんとうをひろげました折しも「うつぼ猿」の「ひもじゅうないか、ママやろか」のぐたり。あゝ云って、あの先生私らの御飯御らんでしたよと姉が申しまして愧入りましたこともございます。それでもたゞ聴き度い一杯で通いつづけておりました。そのうち琵琶愛好者の集い同好会が生まれ、まづそれに入会、ほどもなく東山仁王門本妙寺で毎月一回茶話会が催され、それにも大低欠かさずよせて頂き、段段皆様とも御懇意にして頂く様になりました。

初めは主人もようそんなに精が出ますなと云っておりましたが、大雲院での大会に引っぱり出しましたらすっかり魅了されたらしく、一度自坊の催しに来て頂いてはと、世話方の了解をも得て彼岸会や報恩講にも御演奏をお願申上げる様になりました。ある時石童丸を聴かされた世話方が、ほんとに泣かされるワと云いつつ庫裡へ引揚て行きましたが、素人でも真に迫った御演奏に感激されたことと思います。

尚私の出身校旧制県立大津高女の同窓会にもお出でを願い、二百人余の聴衆をよろこばせましたが、その後ほどなく御演奏下さいました前会長大久保冥水先生が御他界なさいましたことは誠に残念でございました。

古いおなじみの方は協会にも一水会にも多山御健在で誠に賑わしいことでございます。当方主人は勿論、いつでも一緒に来てくれた姉も既に亡くなりましたが、私は続く限りまだまだ聴かせて頂きたい念願でございます。

靖国神社秋の例祭に　十月十三日靖国錦穣、桜水両女史献奏　会館に於て「噫ノモンハン」前半を新部桜水、後半を水藤錦穣両女史が献奏、その熱演は場内を静粛ならしめた。

みやしろの軍馬の像に供へたる
人参あかく秋雨(あめ)に映えたり（靖国祭）
秋雨のあがれば薄き霽あかり
水面をすべる白鳥の列（千鳥ケ渕）
○九段にて　流石

武　絃　会　十月十三日午後一時から第66回研修会　小金井市福祉会館で開催。桜井の駅－五十嵐清華、村上清芳、絃清水源城　本能寺－松田殊水　羅生門－伊藤磐水　白虎隊－土田昇竜　彰義隊－大村誠城　迷語もどき－坂本錦道　台湾入－清水源城　静－加藤喜水　門琵琶－伴流謡切のあと琵琶芸術について意見を交換し五時散会した。

明治百年祭　旧官弊大社平野神社宮司平野神社演奏　田中誠一氏の主催で明治百年を記念して十月二十三日午後七時半から同神社拝殿に舞台を設らえ京都琵琶協会協賛の演奏会が開催された。生憎台風十九号の影響で当夜は秋雨に煙ったが琵琶愛好の老若男女が多数来聴され九時半の終演迄席を立つ人もなく充実した会であった。曲目は主催者側の希望により七卿落－植村冥水、坂本竜馬－中島旭穂、白虎隊－平井春嶺、常陸丸－田中鵬水、静－矢吹華水の五曲を順奏したが何れも同神社に由緒の深いものばかりであった。

日本琵琶楽振興会研究会　十月二十七日午後一谷三丁目林方に於て開催、鈴木密水氏外多数出席、弾交や芸談などで盛会であった。

京都琵琶協会十一月茶話会　十一月二日午後から京都徳雲寺に田中鵬水、中島旭穂、梅原旭濤、矢吹華水、古谷竟水、木村維水、水内媞水、美登里進水、平井春嶺、植村冥水の諸氏が出席し去る十一月二十七日島原歌舞練場に於ける協会演奏会でのテープ録音を聴きその反省や芸談に花を咲かせて八時半散会した。当日は病気や事故で会員六氏が欠席され残念であった。

大阪文化祭祝典に天津旭八千代女史　明治百年記念大阪文化祭祝典が十一月三日フェスティバルホールで催され雅楽と琵琶楽を中心に洋楽、笛を入れた花柳有洸構成振付古典舞踊詩「四天王寺絵巻」に天津旭八千代女史（絃松岡旭岡外）が出演、文化祭で天候にも恵まれ極めて盛会裡に終始した。

――（予　告）――

京都琵琶協会十二月定例茶話会　十二月七日(土)午後一時京都市北区平野神社々務所で開催、当番幹事中島真水、梅原旭濤両氏（同好者の御来遊歓迎。）

――（電話番号変更）――

埼玉県越谷市鈴木密水氏　〇四八九(82)一二四一（代表）、一二四二、一二四三番　に。

――（住所地名改正）――

保坂遡水氏　秋田市土崎港中央七丁目一三の一〇　に。

――（訃　報）――

安倍秀風氏（神心流吟舞道四世家元、京都府詩吟連盟理事長）十一月十一日脳溢血のため急逝、五十七才、謹んで哀悼す。

よもやま（敬称略）

○…錦心流名流大会　十月十二日横須賀文化会館（主催東錦童）　白虎隊－東錦童　菅公－下村吉水　紅葉狩－酒井錦峯　扇の的－細田錦糸　掛合五条橋－大井錦淀、大森錦晨、西錦翠、南錦霞　北の庄－山田旭芳　小袖曾我－西村錦風　両中尉－潮錦燕　茨木－大井錦淀　石童丸－大森錦晨　高松城－西錦翠　本能寺－南錦霞　舟弁慶－秋山錦賜　濤陽江－普門史城　竜の口－鈴木晨水　城山－古田耕水　飯盛山懐古－鈴木密水

○…秋季演奏大会　十月二十日東京銀座交詢社ホール（主催薩摩琵琶正絃会）　蓬莱山－池野谷吟岫　赤壁－田宮吉平　濤陽江－坂本錦道　まごころ－石黒錦歌　鉢の木－立野岳朝　細川の血達磨－三木絃穣　古城懐古－煙山岳想　彰義隊－浜野錦宝　史実白虎隊－柏木篁道　小松の操(二)－曾我竜城　桶狭間－静岡伴野鶴風　祀らぬ御霊－田辺錦波　旅順開城(上)－京都伊吹正陽　同(下)－遠藤鶴東　其日の東郷元帥－京都平井春嶺　威海衛－大村鼓城　城山－札幌横山岳玲　白虎隊－仲川秀邦　広瀬中佐－鈴木鶴謳　挨拶－会長西郷吉之助　台湾入－大阪岡部錦蝶　忠度都落－京都栗本天芳　月下の陣－鈴木鶴岡　岩崎谷－鹿児島安田幸吉　伊藤公－吉成登城　門琵琶合奏－有志　西郷隆盛－東京前田秋声　小敦盛(上)－八束一峰　同(下)－古家絃風　湖水渡－東京田中旭嶺　飯盛山懐古－大和田鶴道　武蔵野－辻靖剛　九連城－西郷天風　久遠の乙女－軽部岳瑞　川中島－栗原雨竹

○…明治百年記念錦心流大演奏会　十月二十日金沢市県婦人会館（主催一水会金沢支部）　竜の口－奥村壮水　羅生門－吉田旭操　月下の陣－星山溪水　あゝ豊川女子挺身隊－村田錦僮　大石主税－中川流水　白虎隊－八田錦琿　安宅の関－坂井旭蘭　湖水乗切－横浜中谷姿水　姫ゆりの塔－滑川蜷川狗水　石童丸－水谷充水　雪の進軍－富山田中愛水　茨木－田中篁水　新撰組－福井吉野洲水　坂崎出羽守－八田夏水　城山－名古屋稲葉葵水　戦艦大和－横浜中谷襄水　安達ケ原－東京鈴木密水

○…第435回秋季演奏会　十月二十六日東京日本橋第一証券ホール（主催榎本芝水）　瓜生岩子－吉田硬水　会津白虎隊－柿木芝昌　鉢の木(上)－近藤司水　楠正成－大森和水